2012年全労済地域貢献助成事業
「東日本大震災復興支援特別枠」報告書

記憶を明日に

被災地の消防団・防災組織が語る東日本大震災

全労済は保障の生協です。
全労済

目次

記憶を明日に

被災地の消防団・防災組織が語る東日本大震災

2012年全労済地域貢献助成事業
「東日本大震災復興支援特別枠」報告書

1 目次 ／ 東日本大震災による東北３県の消防団の被害状況
2 ごあいさつ

東日本大震災・防災レポート

3 No.1 宮古21防災会
5 No.2 釜石市大渡町自主防災会
7 No.3 地ノ森住宅自治会 自主防災組織
9 No.4 長部地区自主防災会本部
11 No.5 山元町消防団
13 No.6 岩沼市消防団
15 No.7 女川町消防団
17 No.8 東松島市消防団
19 No.9 南三陸町消防団
21 No.10 気仙沼市消防団
23 No.11 伊達東仮設住宅飯舘自治会
25 No.12 南相馬緊急防犯パトロール隊（ボランティア）
27 No.13 浪江町仮設住宅自治会
No.14 楢葉町仮設住宅連絡員会
28 No.15 千葉県旭市

まとめ

29 「東日本大震災復興支援特別枠」報告書“記憶を明日に”の制作を終えて

東日本大震災による東北３県（岩手県・宮城県・福島県）の消防団の被害状況 ※平成23年版消防白書より抜粋

(1) 消防団員の被害状況

① 消防団員死者・行方不明者

岩手県	119名	
宮城県	108名	
福島県	27名	合計 254名

(2) 消防団の拠点施設および車両被害状況

① 施設被害

岩手県	87件	
宮城県	229件	
福島県	96件	合計 412件

② 車両被害

岩手県	42件	
宮城県	173件	
福島県	42件	合計 257件

ごあいさつ

女川は流されたのではない
新しい女川に生まれ変わるんだ
人々は負けずに待ち続ける
新しい女川に住む喜びを
感じるために

宮城県女川町立女川第二小学校６年 小野寺柚希さん

絵：女川第一中学校 神田瑞希さん

この詩は女川町の小学６年生 小野寺柚希さんが震災直後につくった詩です。この詩に出会って、東日本大震災に負けず、子どもたちが力強く生きようとする姿に感銘を受けました。

東日本大震災が発生して約２年が経過しようとしておりますが、死者15,879人、行方不明者2,700人（2013年１月16日警察庁まとめ）と多くの尊い命が奪われ、未だ32万人を超える方々が避難をしている状況でございます。さらに、地域の防災・減災活動を行っている消防団等も多くの被害を受けられたことが発表されています。

このような状況下で、私たちに何かできないかと考え、1992年より実施している全労済地域貢献助成事業（環境分野・子ども分野）に新たに「東日本大震災復興支援特別枠」を設け、被災地の消防団等の活動復旧のため、助成金を贈呈し、支援を進めていくこととしました。

また、東日本大震災における消防団等の活動やその貴重な経験を広く社会に告知し、後世へ伝えることにより、全国的な防災・減災の意識の高揚と一層の強化を目指すため、消防団等の方々から直接お話をうかがい報告書を作成することとしました。

取材を通して、震災直後の消防団では人手はいくらあっても足りない状況だったこと、高齢者の避難誘導を見直す必要があること、さらに若者の団員が不足している等、消防団の方々から貴重な経験やさまざまな課題についてお話をいただきました。

この報告書の中には、東日本大震災を経験した方々の“声”が詰まっております。全国で防災・減災活動を行っている皆さまやそれ以外の方々にもご一読をいただき、今後の消防団活動の参考や地域コミュニティの発展へと役立てていただければ幸いです。

全労済では、今後も復興に向けた支援に取り組んでいき、理念である「みんなでたすけあい、豊かで安心できる社会づくり」を実現してまいります。

引き続き全労済へのご理解とご協力をお願い申し上げます。

2013年２月

全国労働者共済生活協同組合連合会
代表理事 理事長
田原 憲次郎

宮古 21 防災会

備えがあっても、使えなければ意味がない

PROFILE

県庁所在地の盛岡市から、直線距離でおよそ90km東に位置する宮古市。相次ぐ市町村合併により広大な面積を持ち、人口も岩手県沿岸部の市町村の中で最も多い。東日本大震災では、リアス式海岸に面していることもあり、大きな津波の被害を受けた。宮古市の津軽石地区には自主防災組織があるが、中でも最も活発に活動しているのがこの「宮古21防災会」だ。年に2回の防災訓練をはじめとし、排水のための側溝の整備なども行っている。会長を務める藤沼久人さんは、宮古市防犯協会連合会の副会長などほかに5つ以上の組織の役員を務める、地域の要となる人物。今回は津波によって水害に遭ったお宅で話をうかがった。

お年寄りを軽トラックの荷台に乗せ、救出して回った

震災が起きたときは、自宅にいました。揺れが収まって外に出ると、津波が来ると防災無線が知らせていたので、すぐに公民館などの避難所の鍵を持って解錠しにいきました。津軽石水門は10m近い高さがあるのに、それを超えて水が入ってくるのが見えたんです。これはまずいと思いました。軽トラックで、お年寄りを助けて回り、津波に追われながら避難場所にたどりつきました。避難生活が始まってからは、市の職員らと連携して、防災会の役員が2人ずつ交代で避難所の番をしました。電気も水道も、20日間くらい使えず、発電機などを駆使しながらなんとかしのぎました。常に機材の整備をしておいて、本当によかったと思います。

この部屋でパソコン作業をしていたときに地震が起きた

若い人も防災訓練に積極的に。飲み会を通じて交流を深める

震災前は、「過去に津波が来たことはないから」と、防災訓練に参加する人も少なかったんです。しかし、震災後は、若い人たちも積極的に参加してくれるようになりました。私は常日頃、「自分の身は自分で守れ、自分の地域は自分で守ろう」と声をかけてきたのですが、それが浸透してきたように感じます。防災会の手伝いを申し出てくれる人も増えました。訓練の後に飲み会を開くと、けっこう皆さん参加してくれるんですよ。そういった機会を積み重ねながら、防災組織を若い人に引き継いでいきたいですね。

防災会設立当初から会長を務めている藤沼さん

現場で見つけた改善点を行政に伝えていくのも大事な仕事

橋のすぐ下まで水とがれきが流れてきていた

今回の震災で、私たちは防災会としてすぐに救助活動・避難誘導活動を行ったのですが、私服だと一般市民と間違えられて活動がままならないことがありました。そこで、「宮古21防災会」と入った上着をつくることにしました。また、一時的な「避難場所」の整備の必要性も感じました。避難場所は高台にあるため、電気もトイレもなく、長時間過ごすのにはかなり大変です。もっと整備できないかと、要望を市に提出しています。現場の抱える問題と行政で考えている復興計画には、まだ隔たりがあるように感じます。そこを埋めていくのも私の仕事です。

Q&A

Q. 災害が起きる前の備えとして、気をつけておくべきことはありますか。

A. 毛布や発電機などの防災グッズを、避難所である学校に保管している地域はあると思います。保管場所の鍵は町内会長など地域住民に預けておくのがいいでしょう。学校関係者は遠方から通勤していて、災害時に学校の近くにいない場合があるからです。

Q. 震災時に一番大変だったことはなんでしょうか。

A. 震災が起きて約20日間、電気が来なかったことですね。電気がないと、水道も使えないからごはんも炊けない。携帯電話の充電もできない。何もできないんです。発電機はありましたが、数が足りなかったので、震災後に買い足して公民館に常備することにしました。

取材を終えて

「自分の身は自分で守る、地域は地域で守る」が印象的でした

震災後、防災会の活動の重要性を伝えることで、若者が積極的に訓練に参加するようになったというお話をうかがい、日々力強い活動を行っている「宮古21防災会」から私も力を分けていただいたように感じました。今後も「自分の身は自分で守る、地域は地域で守る」をモットーに活動を行っていただきたいと思います。

全労済
総務部
社会貢献推進課
主任
長倉博志

取材協力：　宮古21防災会 会長 藤沼久人さん

取材日：2012年10月9日

釜石市大渡町自主防災会
「みんな走れ！」日頃の訓練が生んだ奇跡

PROFILE

184人の児童が自力で避難し、巨大な津波を生き延びた岩手県の釜石小学校。この体験は“釜石の奇跡”と呼ばれ、東日本大震災で得た危機対応のモデルケースとして語り継がれている。しかし、一時的に避難する高台の「避難場所」と避難生活を送る「避難所」を間違え、低地にある防災センターに避難し、津波に飲み込まれた人もいた。その明暗を分けたものは何だったのか。昔から町内会組織が発達し、地域住民の意識も高かった大渡町は、釜石市で初めて自主防災組織がつくられた地域だ。大渡町の防災会長を務める荻野さんに、日頃の訓練の大切さ、そして震災当時の対応、避難所生活についてうかがった。

朝６時からでも100人が集まる、毎年恒例の防災訓練

釜石市では東日本大震災の前から、毎年３月３日に避難訓練を行ってきました。過去の津波の教訓を忘れないようにです。朝６時からの訓練でも、100人くらいが集まります。群馬大学大学院の片田敏孝教授を防災アドバイザーに迎え、防災の勉強会を開くなどもしていました。3年前から下校時の避難訓練も実施していました。訓練を1回でも経験すれば、いざというときも、とっさに体が動きます。どこが安全かわかるんです。自宅の3階にいれば助かったのに、わざわざ低地に出ていって津波に飲まれてしまった人もいました。津波が来たとき、皆が自主的に「走れー！」と大声を出して、一目散に高台に走っていけたのも、訓練あってこそです。

町を見下ろす高台。当日はここから津波が見えた

避難所では指揮系統を明確にして、安否確認を第一に

私自身、一瞬、車で逃げようかと思ったんです。でも訓練時に「車を使うな」と言っていたことを思い出し、走りました。そうしたら道路は大渋滞。そこに津波が来て、まるでおもちゃのように車が流されていきました。これは長期戦になると被害の状況を見て判断し、まず小学校の体育館を避難所としました。毛布を高齢者と児童に配り、短冊を各家族に配りました。住所・氏名・年齢を書いて安否確認に使うためです。また、その日のうちに名簿を張り出し、誰がどこにいるのかを把握できるようにしました。当日の21:30には避難者が560人に増えていました。

避難所の運営に、町内会の結束が活かされた

避難所生活を協力して乗り越え、町は復興へ向かう

釜石小学校は現在、耐震補強中。来春には開校する

避難所では「おにぎり係」まで分担し、物資の要求は班長・副班長だけと決めました。組織がしっかりしていると、混乱が起きないのです。朝晩はミーティングをして、トイレ掃除は当番が行う。衛生面の問題も起きず、病人もほとんど出ませんでした。そのうち少しずつ、仮設住宅に移る人も増え、避難所は解散しました。今、だんだん釜石に活気が出てきたように感じます。いったん県外に出ていた人も、釜石に戻っているようです。これからは、町内会も含め、組織の若返りをはかりたいですね。仕事をつくり、若者に戻ってきてほしいと思います。

Q&A

Q. 津波が引いた後、町はどんな状況でしたか。

A. 建物が壊れているのはもちろん、ゴミ収集所の鉄製ゴミ箱が流されていたので、震災後、また買って設置しなければいけませんでした。また水が引いてから自宅を見に行ったら、加工工場のチョウザメやら、青果市場の野菜やらが流れてきていてびっくりしました。

Q. 震災に備えて、家庭でできることはありますか。

A. 家族の避難所を決めておくといいでしょう。震災後、山を越えてみんなのいる避難所に来た親戚もいました。場所の情報を共有していれば会えるんです。そして、慌てたときは水を1杯飲む。それから行動する。落ち着いて、自分の命を守りましょう。

取材を終えて

地域と学校の連携が釜石の奇跡へとつながったのだと思います

津波による被害が甚大だったにもかかわらず、小中学生の99.8%が無事だったという釜石市。地域住民にも「何かあったら、釜石小へ」という意識が根付いていること、緊急時のために、学校の鍵を荻野会長が預かっているということから、学校と地域が協力し合って防災活動に取り組んでいることが素晴らしいと思いました。

全労済
総務部
社会貢献推進課
主任
加藤麻実子

取材協力：　釜石市大渡町自主防災会 会長 荻野哲郎さん

取材日：2012年10月9日

地ノ森住宅自治会 自主防災組織

チリ地震津波の経験を、今に活かす

PROFILE

岩手県南部の太平洋沿岸地域にある大船渡市は、岩手県内最大級の大船渡港を持つ、三陸海岸南部の代表的な都市だ。市の一帯はリアス式海岸となっており、湾に面していない地域まで津波が押し寄せ、建物が全壊する被害を被った。この大船渡市で一番先にできた仮設住宅が、地ノ森仮設住宅だ。高齢者世帯、障がい者、要介護者、乳幼児のいる世帯などが優先して集められたため、大船渡のほかにも、赤崎地区、盛地区、末崎地区などいくつかの地域の住民が集まっている。ここでは、自治会長の三浦さん、副会長の西山さん、総務部長の金さんに、仮設住宅での防災活動についてうかがった。

住民みんなが津波の経験者。防災訓練も自分ごととして取り組む

この仮設住宅の住民は、全員が津波の体験者です。だからこそ、自主防災組織をつくって、年に１回は防災訓練をしましょうと提案したときも、みんな賛同してくれました。これまで２回の防災訓練を実施しています。障がい者の方を担架で運ぼうとしたら、通路が狭くて転倒してしまうなど、実際に避難してみることでわかることはたくさんあります。訓練は、規模よりも継続が大事です。今回の震災も、それまでに一度でも避難訓練に参加した経験のある人は、生き延びた確率が高いといわれています。とっさのときに、ちゃんと靴を履いて、指定された避難場所に逃げる。これは簡単なように見えて、意外と経験がなければできないことなのです。

２階建ての建物を飲み込むほど高い津波が押し寄せた

チリ地震の経験から、防災ザックの重要性を実感

赤崎地区は、1960年のチリ地震による大津波を経験しています。その経験から、赤崎地区の住民が常備していて、今回の震災時に大活躍した防災グッズがあります。それは「防災ザック」です。リュックサックに、食料品や着替え、女性であれば下着や生理用ナプキン、赤ちゃんのいる家庭はオムツなど、それぞれ必要な物を入れ、避難時にさっと持ち出すのです。真っ暗な避難所で、ザックに入っていた飴やチョコレートが、どんなに気を紛らわせてくれたか。今回、全労済さんに助成金をいただいて、この仮設住宅では、全世帯にザックを配布しました。

ヘルメットも収納できる防災ザックを住民に配布

住民の情報を共有し、助け合うコミュニティをつくる

住民を孤立させないしくみを自治会で考えている

地ノ森仮設住宅は、ほかの仮設住宅に比べて仲がいいといわれているようです。窃盗などの問題もほとんど起きません。住民の名前を公開し、自力で動けない人は「おんぶマーク」をつけるなど、どこに、どんな助けが必要な人が住んでいるか、皆で把握しています。これは、当たり前のようで、実施できていないところも多いようです。これからは、地域の皆さまともこの情報を共有し、防災活動を進めていきたいと考えています。いざというときに、仮設住宅が避難所になるかもしれません。また、震災時の情報伝達についての訓練もしていきたいです。

Q&A

Q. 震災時、仮設住宅近くの大船渡病院はどんな状況でしたか。

A. 野戦病院のようでした。外まで人がずらっと並んでいて、やっと入れても１日分の薬しかもらえない。持病をお持ちの方は、１週間分の薬を防災ザックに入れておくといいと思います。また、薬の名前を確認できる、お薬手帳などを持っておくといいでしょう。

Q. なぜ地ノ森仮設住宅は、住民の仲がいいのでしょうか。

A. 外にベンチが置いてあり、座っていると自然にコミュニケーションが生まれるんです。また、集会所で手芸のふくろうをつくるなど、集まるきっかけをつくっています。閉じこもっていると、よくないですからね。おかげで、地ノ森は入居希望の方も多いそうです。

取材を終えて

皆さまから元気をいただくことができました

仮設住宅で自主防災組織を設立し、活動している状況ですが、お話をうかがった方々は非常に元気で、私自身も元気をいただくことができました。また、昭和35年に発生した津波の経験を活かし、今回の助成金を利用し、防災ザックを購入する等、過去の経験を活かしながら活動していらっしゃるのが印象的でした。

全労済
岩手県本部
事業推進部
部長
佐藤雅喜

取材協力：　地ノ森住宅自治会 自治会長 三浦正明さん　　副会長 西山謙一さん　　総務部長 金誠基さん

取材日：2012年10月10日

長部地区自主防災会本部

連絡、救助、炊き出し、救護と役割を決める

PROFILE

陸前高田市は、宮城県の気仙沼市と隣接する三陸海岸沿いの町だ。この地域は津波が多く、2010年のチリ地震でも警報が出され、津波への意識が高まっていた矢先、東日本大震災が起こった。津波で市の中心部は大きな被害を受け、市の全世帯中７割以上が被害を受けた。高田松原の防潮林で１本だけ残った松は「奇跡の一本松」とよばれ、震災後希望のシンボルとなった。陸前高田市の長部地区には、2004年から自主防災組織がある。毎年５月には避難訓練をし、緊急時の役割分担も事前になされていた。それが震災時にどう機能したのか、自主防災会本部会長の菅野さん、長部地区コミュニティ協議会事務局長の小泉さんにうかがった。

組織の起点となる班長は、なるべく家にいられる人に

ここは、いつか大きな地震が来るといわれていた地域です。なので、自主防災会では、役割によって班を分け、毎年避難訓練をしていました。まず、班長としてなるべくいつも自宅にいられる方を選出します。そして、災害情報を周知する「情報連絡班」、避難誘導・人命救助にあたる「避難救助班」、炊き出しを行う「炊出給食班」、病人やけが人の手当を行う「救急救護班」をあらかじめ決めていました。震災当日は情報連絡班が大声で避難をうながし、避難救助班は軽トラックでけが人や高齢者などを運びました。通常は車で避難することは勧められませんが、軽トラックであったことと、道が通れたことで結果的に速く救助ができたのです。

30mを超える津波はまったく想定されていなかった

揺れが収まってから、津波は襲ってくる

私は消防団に32年いましたが、こんなに大きな津波は初めてでした。震災の３日前にも地震があったのですが、そのときは津波が来なかったので油断していた人もいたようです。また、揺れが収まってから自宅を見に戻って、津波に飲まれた人もいました。津波の中には、がれきや材木が流れています。それにあたってしまうと、もう助かりません。避難所で、夜になってからあまりに寒くて焚き火をしました。それから炊き出しの用意です。ここで、日頃から電気・水道が停止した状態で炊き出しを行う訓練をしていた、炊出給食班が活躍しました。

自主防災会メンバーは徹夜で避難所の見張りをした

プロパンガスと備蓄してあった米が命をつないだ

米がなかったらと思うとゾッとすると語るお二人

国道ががれきで寸断され、実質この地区は１週間ほど陸の孤島となってしまいました。ひとつ幸運だったのは、ガスがプロパンガスだったことです。各家庭や施設などからガスボンベを集め、米を炊きました。米は各家庭に備蓄していたのを集め、自家発電機を動かして精米しました。支援物資が届くというニュースが流れてからも、ここには物資が届かなかったのです。支援は各地域の状況を把握して行ってほしいと感じました。また地域の住民同士も、行政に頼るのではなく、助け合い一緒に組織をつくっていくことが必要です。

Q&A

Q. 避難時、もしくは避難生活中で、必要を感じたものはありますか。

A. 震災の経験を活かし、各支部にマイクを常備することにしました。やはり、危険をよびかけるにも肉声では限界があります。あとは、救急箱、ふろしきなども、けが人の救助をするときには必要だと感じました。ポータブルトイレも、あると便利です。

Q. 長部地区には7つの支部がありますが、防災意識の差を感じることはありましたか。

A. 過去に津波が来たことがある地域とない地域では、だいぶ差がありました。避難訓練の参加実績にもそれは表れています。悲しいことにそれは死傷者の数にも反映されてしまいました。もっと、研修会をやるなど防災意識を高める活動を日頃から行うべきでした。

取材を終えて

助けを待つだけでなく協力して乗り切ろうという姿勢に感動しました

陸前高田市は、市街地の家屋建物のほとんどすべてが津波に流されてしまい、そこに町があったことが信じられないほどでした。そのような状況でも、ただ助けを待つだけでなく、みんなでできることからやっていこうと活動されたため、死傷者を最小限に食い止めることができたのではないかと思いました。

全労済
岩手県本部
事業推進部
部長
佐藤雅喜

取材協力：　長部地区自主防災会本部 会長 菅野征一さん　　長部地区コミュニティ協議会事務局長 小泉正喜さん

取材日：2012年10月10日

山元町消防団
心をひとつに、団結力で地域の安全を守る

PROFILE

宮城県の東南端、太平洋沿岸に位置する山元町。東日本大震災において、海岸地域は、津波の直撃により甚大な被害を受けた。その中で、いち早く人命救助にあたり、不休で復興活動に尽力したのが「山元町消防団」だ。日頃から、隣接する亘理町と共同で阿武隈川流域の水害対策を行ったり、婦人防火クラブと交代で不審火を警戒したりと、地域一丸となった防災体制を築いてきた。山元町役場 危機管理室の武田室長は、「地域に密着した消防団の皆さんがいなければ、自衛隊など全国からの応援を活かしきれず、復旧・復興は遅れていたでしょう」と言う。当時の状況について、団長の伊藤由信さんに話をうかがった。

生死の境を分ける72時間、必死に行方不明者を探した

地震発生直後、ぐちゃぐちゃになった家の中からどうにか消防団のハッピを探し出し、本部に駆けつけました。当然、団員もその家族も被災している状況でしたが、その日は10名、翌日は約150名が集まってくれました。はじめの3日間は人命救助を最優先とし、警察や自衛隊に道案内をしながら、行方不明者の捜索を行いました。団員は、住民の顔はもちろん行動範囲もわかっていますから。災害から72時間が経過すると生存率が急激に下がるといわれています。一刻を争う状況下で、「自分たちの地域は、自分たちで守る」という使命を胸に、夢中で活動していましたね。この間、飲料水は手に入らず、1日の食料はおにぎりが1個という極限の状態でした。

震災後、人手はいくらあっても足りない状況だった

警察、自衛隊、行政と協力し合い、1日も早い復興を

団員たちは朝から晩まで82日間休むことなく、捜索やがれき撤去などの活動を続けました。1日も早く町を復興させたい。そう思うと、休んでなどいられなかったのです。重機による道路上のがれき撤去作業が本格化すると、全国から訪れた人々の車両が進入し、復旧作業や遺体の搬出ができなくなってしまいました。そこで団員が、住民以外の通行を停止するなどの交通整理を行い、作業がスムーズに進行するよう動きました。警察、自衛隊、行政と連携することで、効率的な復興活動が展開できたと思います。

「各団体が連携し全力を尽くした」と伊藤さん

災害時に情報伝達しやすい体制をつくることが重要

役場の危機管理室と情報を共有し活動している

振り返ってみると、地震から津波発生までの情報伝達がいまひとつでした。当初は携帯電話が通じましたが、すぐに通じなくなった。災害時の連絡手段を、携帯電話に頼っていたんですね。迅速な情報伝達は、二次災害を防ぐためにも重要です。反省し、トランシーバーを導入しました。よかったことは、団員同士はもちろん各団体との協力体制がすばやく組めたことです。日頃からの訓練なしに、災害が起きてから急にというのでは難しかったでしょう。地道に消防団の活動を続けてきたかいがありました。

Q&A

Q. 震災や復興活動を通して得られた気付きや思いを教えてください。

A. 人生、何があるかわからない。だからこそ、前向きに生きていくことが大事なのだと思いました。ここまで復興できたのは、みんなが前向きな気持ちを持っていたことと、それを応援してくれる人たちがいたおかげです。本当にありがたい。感謝しています。

Q. 消防団の活動において、今後の課題や目標はありますか。

A. 災害発生時、団員が活動するためには、職場となる企業のご理解とご協力が必要です。消防団の活動が社会貢献のひとつであることを、地域や企業の皆さんにもっと積極的にお伝えすることで、団員が活動しやすい環境をつくっていきたいと考えています。

取材を終えて

消防団の災害に対する一生懸命さが伝わってきて感動しました

山元町消防団は地域に根ざした活動をしており、地区に誰が住んでいるのかを把握していることが、震災で大変役立ったそうです。しかし、混乱して情報がつかめないため活動が思うように行かなかったことや、現場に行きたくてもがれきや浸水のため歯がゆい思いをしたとのこと。真摯なお話に心を打たれました。

全労済
宮城県本部
事業推進部
部長
白川尚正

取材協力：　山元町消防団 団長 伊藤由信さん　　山元町役場危機管理室 室長 武田正則さん　　同主査 鈴木宏幸さん

取材日：2012年10月17日

岩沼市消防団
教訓は「地震が起きたらとにかく逃げる」

PROFILE

宮城県の中央部、仙台市の南17.6kmに位置する岩沼市。太平洋に面した町を津波から守るため、高さ7.2mの海岸堤防を築いていた。しかし、東日本大震災で発生した津波は、この堤防を軽々と越えて町を襲った。高い建物が少ない同市では、太平洋岸からわずか2kmにある仙台空港や、仙台東部道路が急遽、避難場所となったという。「堤防があることでかえって油断し、亡くなった人たちもいた。日頃の防災意識が命運を分けた」と岩沼市消防団の団長 田村善洋さんは語る。地震発生から津波到達までの間、岩沼市消防団の活躍により、多くの命が救われた。そのときの様子と得た教訓について、田村さんにうかがった。

避難誘導の最中、津波に巻き込まれた

津波の犠牲者の大半は、逃げなかった人たちです。2010年にチリ地震が発生したときには、50cm程度の津波しか来なかったので、今回も大丈夫だろうと楽観視した人たちが多かった。防波堤を越える津波なんて来るわけない、と思っていたんです。団員たちはできる限りの説得をしながら避難誘導を行い、震災後には多くの感謝の声をいただきました。しかし、6名の団員が殉職しました。津波が引いた後、消防団の車の座席に、高齢者がシートベルトをした姿で見つかりました。団員が助けようとして車に乗せ、そこで津波に襲われたのでしょう。6名はまじめで一生懸命だったからこそ、ギリギリまで救助を続け、命を落としてしまったのです。

震災直後、何も情報がない中で活動を続けた

団員の安全を守るため、基準を設け無線を整備

今思うと、まずは団員の安全を確保すべきでした。津波警報が発令された場合、団員は地域の人たちを避難誘導し状況を本部に報告することを、平時より定めていました。しかし、団員の避難基準については、取り決めていなかったのです。今後は、遅くても津波到達の10分前には活動を停止し、高台などの安全な場所に避難するよう取り決めました。また、震災時には携帯電話が不通になったことから、デジタル式の携帯無線機と車載無線機を増設しました。消防本部からの情報が直接届けられるので、状況をリアルタイムで確認しながら活動できます。

「新規団員を増やすことも課題です」と田村さん

日頃、訓練しているからこそ、とっさの判断ができる

消防団も平時の訓練を活かして多くの住民を救った

地震が起きたらとにかく逃げる。また、どこに逃げるか、日頃から意識を持って訓練しておくことが大切です。海から200mの場所にあった老人ホームでは、寝たきりの入居者がいたにもかかわらず、約100名の入居者と40名の職員全員が助かりました。このホームでは常に高い防災意識を持って、地域の人たちと一緒に避難訓練をしていたのだそうです。今回の震災では、想定より高い津波が来ると知り、職員のとっさの判断で、近くの仙台空港に避難場所を変えました。機転を利かせ無事に避難できたのも、訓練していたからこそでしょう。

Q&A

Q. 震災後、地域や消防団の取り組みに変化はありましたか。

A. 2012年9月に、仙台東部道路を避難場所として訓練を行ったところ、これまでにないほど多くの方が参加されました。震災時、仙台東部道路に逃げて助かった人がたくさんいたので、道路に上る階段を設置し、緊急避難場所として活用できるようにしています。

Q. 救助活動やその他の活動を通して、どんな思いをお持ちでしょうか。

A. 団員たちも被災者です。家族や家を失った団員もいて、退団届けが出されてもおかしくない状況でしたが、1枚も出されなかった。東北の人間は、朴訥で口に出さない気質です。大変でも何も言わず、ただ一生懸命活動する。そんな団員たちを誇りに思います。

取材を終えて

「まずは団員の安全の確保が重要」が印象的でした

以前は「地震が起きたら海を見に行け」と言っていたこともあったそうです。今回の東日本大震災で団員の方が亡くなられた経験から、安全確保の重要性を最も訴えていたことが印象的でした。また、若い入団者が少なく、団員の平均年齢が高齢化していることなど、消防団の課題についても語っていただきました。

全労済
宮城県本部
事業推進部
部長
白川尚正

取材協力：岩沼市消防団 団長 田村善洋さん　岩沼市消防本部 総務課長 司令 相原照義さん
岩沼市消防本部 総務課 主幹兼係長 村上良幸さん

取材日：2012年10月17日

女川町消防団
地域への声かけが大きな悲劇を防いだ

PROFILE

豊かな水産資源に恵まれたリアス式海岸と、日本屈指の女川漁港を有する女川町。町中心部から約16km、太平洋に面した場所に女川原子力発電所がある。東日本大震災では、最大高14.8mもの津波に襲われたが、高台にある女川原発は直撃をまぬがれた。「津波が来ることは想定していた」と語る鈴木正文さんは、この町の安全を守る女川町消防団の団長でもあり、地域の行政区長でもある。日頃から高い防災意識を持ち、原子力防災訓練や、離島でのヘリコプター離着陸訓練などのほか、地域への啓発活動を活発に行っていた。今、求められている地域ぐるみの防災意識と、消防団の活躍について、鈴木さんに話をうかがった。

「津波が来たら高台へ」具体的な声かけをくり返し行った

浜で仕事をしているときに、震災が発生しました。みんなに「避難しろ」「戻るなよ」と声をかけながら自宅に戻り、車で役場へ向かいました。私が住んでいる地域には約80名の住民がおり、高齢者も多いので心配でした。震災の翌日、全員が無事だという知らせが入ったときには、本当に嬉しかったですね。毎年、地域の総会で、「津波が来たら、高台に逃げろ」とくり返し伝えてきました。このくり返しが大事なんです。特に高齢者は、ふだん行きなれた集会所に避難しようとするので、丁寧に、正確に「津波が来たら高台」と伝えなければいけない。あわせて、広報誌やチラシでの啓発や、ふだんの声かけを積極的に行ってきました。

平野部は津波の被害と地盤沈下により壊滅的な状態

隣町の仮設住宅で、自営消防団を新たに結成

女川は壊滅的な被害を受けましたから、仮設住宅を建てるための土地が足りず、300世帯の住民が、石巻の仮設住宅に移り住んでいます。地元への愛着から、女川の団員たちが、火の用心のステッカーやチラシを配りに行くだけでも「顔を出してくれて安心した」と喜ばれます。「何かあったら、女川の消防団に来てほしい」とも言われるのですが、石巻の管轄なので、不都合もあります。例えば、消火栓は石巻のものですから、女川の消防団が勝手に使うわけにはいきません。そこで、仮設住宅に住む人たちによって、自営消防団を結成する計画を立てています。

「町をまとめ孤立を防ぐことが大事」と鈴木さん

地域への思いがあっても活動できない団員たちがいる

復興への一歩として土地のかさ上げ工事が始まった

震災後、約10名の団員が入団しました。40代の新規入団もあり、これは過去にはなかったことです。今回の消防団の活動を目の当たりにした地域の皆さんが、「消防団に協力したい」と思ってくれたんですね。一方で、就業や子どもの教育の問題から、女川を離れた団員たちもいます。増えた団員よりも、減った団員のほうが多いため、団員の確保が課題となっています。「戻りたい」という連絡をくれる団員もいるのですが、仮設住宅の空き待ちが80名以上いて、戻りたくても戻れないのが現状です。国の復興整備が進むことを願っています。

Q&A

Q. 震災直後の消防団の活動について教えてください。

A. 人命捜索や遺体収容作業にあたったのですが、正直、目にする光景が日を追うごとにつらくなっていきました。作業の合間にも余震が続き、何度も警報が鳴り響きます。離島や半島ではさらに危険が大きいため、団員たちがお互いを見渡せる範囲のみで活動しました。

Q. 震災の前と後で、思いや行動に変化はありましたか。

A. 地域の人たちに頼りにされていることを実感しました。震災後、女川の中学生が「防火防災に関する作文コンクール」で最優秀賞を受賞しました。作文には、消防団への感謝の言葉が綴られていて、胸が熱くなりましたね。これからももっと頑張ろうと思いました。

取材を終えて

自らよりもまず町を助けたいという強い思いと決意を感じました

平成23年度「防火防災に関する作文コンクール」の最優秀賞作には「自らが被災しているにもかかわらず、町のために働いてくれる消防団はとても頼もしい存在だった」ということが書かれていました。女川町消防団の、自らよりもまず町を助けたいという強い思いが、住民にも勇気を与えたのだと思います。

全労済
総務部
社会貢献推進課
主任
加藤麻実子

取材協力：　女川町消防団 団長 鈴木正文さん　　女川町 企画課防災係 災害対策本部事務局 係長 阿部清人さん

取材日：2012年10月23日

東松島市消防団
想定外の事態に、消防団は立ち向かった

PROFILE

宮城県の中部に位置する東松島市。日本三大渓のひとつである嵯峨渓を有する風光明媚な土地だ。市長が「安全・安心なまちづくり」をかかげていることもあり、防災意識を高める活動が盛んな地域でもある。かねてから大地震が起きて、津波が来るということも予想されていた。そのため、地域のコミュニティセンターに災害科学の専門家である東北大学大学院の今村文彦教授を招き、学校関係者や自主防災組織、市議会議員なども参加して、防災の講習会を行うなどもしていた。防災マニュアルが90%できていた状態での、東日本大震災。それは、すべてが想定外だった。震災当時の様子を、消防団長の雫石さんにうかがった。

すべてが想定外の規模。訓練していても為す術がなかった

消防団ではいつも、消防や水防の訓練をしていました。津波が来るといっても、せいぜい2mくらいだといわれていたんです。あの日は、すべてが特別でした。地震後、電気をはじめとするライフラインがすべてストップ。そして46分後には津波が来ました。早く逃げれば助かることは、みんなわかっています。しかし、まさかここまで来ないだろうというところに津波が到達したので、対応しようがなかったのです。全体で死者は1,000人を超え、全住宅の3分の2以上が全半壊しました。消防団員も8名が殉職しました。主に、避難誘導、人命救助、水門操作中に亡くなっています。水門も3mしかないんです。この津波に対しては意味をなしませんでした。

港から住宅地を抜け、船が運河まで流されてきた

がれきの山を乗り越え、人命救助に向かった

この非常事態に、消防団員も人命救助活動に奔走しました。しかし、海岸から流れてきた松の木で国道が完全に封鎖されている。この事態も想定外で、これまでつくっていた救助のマニュアルでは対応できないことがわかりました。地域の方が歩いて市役所まで来て、「あのあたりに被災者がいるらしい」と伝え、また消防団員が歩いて現場に向かう。1日がかりの救助になり、すでに亡くなってしまっている方もたくさんいました。そんな体験から、震災後トラウマを抱える消防団員も出ています。団員の心身の健康管理も、今後の課題です。

遺体を捜索する仕事も消防団が請け負った

救助と自身の安全。どちらをとるかの結論は容易に出せない

復興だけでなく高齢化の進む地域の活性化も課題

溺れている人がいたら助けるのが消防団員です。無理だと思っても、水に飛び込んでいく。今、消防団員の安全マニュアルをあらためて作成していますが、どこで活動を線引きすればいいのか、結論は出ていません。また、消防団員の中には、この震災で仕事と家の両方をなくし、県外に出ていってしまっている人もいます。これまでのメンバーで、活動していくのは難しいでしょう。地域全体でも、高齢者は地元に残りたいと願い、若い家族は出ていってしまう。農業の後継者不足も深刻です。行政の力を借りながら、みんなで頑張っていくしかありません。

Q&A

Q. 救助活動で、必要を感じたものはありますか。

A. 連絡を取るための無線機です。電話はすべて通じなくなりました。電気がないので、携帯電話も充電できないのです。発電機で無理に充電すると、電圧が低いためバッテリーが壊れてしまうことも。車から充電できるアダプターを購入する人が増えたようです。

Q. 今、消防団員は何名くらいいるのでしょう。

A. 震災前は650人くらいいたのですが、今は名簿上で620人程度、実際に活動できるのは400～450人ほどでしょうか。消防団も高齢化が進んでいるため、新しく若い団員を募集したいですね。今後は女性団員も増やしていきたいと考えています。

取材を終えて

消防団の団長としての誇りを感じることができました

職や家を失う人、他県へ引越す人による団員減少や若手の団員の減少等さまざまな課題がある中、常に課題を克服していこうという団長の熱い思いに感動いたしました。また、全労済へ期待することとして、地域の活性化のための活動を今後も継続してもらいたいとお言葉をいただき、ありがとうございました。

全労済
総務部
社会貢献推進課
主任
長倉博志

取材協力：　東松島市消防団 団長 雫石堅持さん　　東松島市 総務部 防災交通課 主事 内海直樹さん

取材日：2012年10月25日

南三陸町消防団
自分の身を守るのは、何よりも大事なこと

PROFILE

南三陸町は地形的な特性から津波の影響を受けやすく、1896年の明治三陸大津波、1933年の昭和三陸大津波、1960年のチリ地震津波によって、大きな被害を受けている。住民はみんな「地震の後には津波が来る」という意識を持ち、避難訓練も定期的に行っていた。沿岸には防波堤や防潮堤、水門などが設置され、津波対策は万全かと思われた。しかし、東日本大震災で発生した津波は、これまでの前提をすべて覆すほど巨大なものだった。3階建ての防災庁舎を軽々と飲み込む規模の津波を前に、消防団はどう動いたのか。団長の菅原さん、副団長の山内さん、南三陸町危機管理課係長の佐藤さんにうかがった。

津波が来ないはずの高さ・地域にまで水が押し寄せて来た

津波の避難訓練は、毎年行っていました。しかし、それは10mの津波を想定したものでした。今回も、最初の警報では6.9mの津波と想定されていたんです。しかし、実際それをはるかに上回る、20～30mの津波が押し寄せました。そうなると、避難場所に設定していた施設すら飲み込まれてしまった。建物の3階程度じゃダメなんです。通常は津波が来ないような内陸部にまで、山を回り込んで水が来ました。防災センターのアンテナにつかまって、なんとか助かった者もいました。何十年も訓練はしてきましたが、この巨大津波の前では、正直、おろおろするばかりでした。3～4人の救助はしましたが、それが精一杯だったのです。

防災センターですら津波に飲み込まれてしまった

自分が助かってこそ、人の命も救えることを学んだ

揺れが収まり、消防団員にも救助の要請がありましたが、団員の安全を考えて当日の夜は派遣しないことを決めました。この寒さ、そして電気がつかない暗闇の中に団員を送り出すわけにはいかないと判断したのです。この震災までは、消防団員というのは最後まで役目を全うする使命があると考えていました。そこに疑いはなかったんです。水門も責任を持って団員が手動で締めるものだと。しかし、警察官や消防署員の仕事に対する考えを聞いて、まず守るべきは自分の身なんだと痛感しました。自分の命が危うい状態では、人の救助もできないのです。

水門の開閉は、遠隔および自動化をお願いしたい

避難している団員も集まった。消防団の団結力は揺るがない

500名以上を抱える南三陸町消防団の結束は強い

震災から数日後は、他県から来ている消防署員や自衛隊の道先案内や、ガソリンスタンドから燃料が盗まれるのを防ぐための見張りなどをしていました。建物が流され、道もなくなっている中での活動は大変でした。5月には電気が戻り、少しずつライフラインも整ってきました。避難生活を送っている団員もいるのですが、団員に招集をかけたら、80%以上が集まったんです。消防団の団結力が衰えていないことを実感し、心強く思いました。今後は自分の身を守ることを第一とし、この消防団をずっと存続させていきたいです。

Q&A

Q. 震災当日の消防団活動で、気になったことはありますか。

A. 消防団の避難誘導に従わず、津波の犠牲になった方がたくさんいました。道を封鎖しないと、危険な区域に戻ってしまう人もいました。地震と津波の間には時間がありますが、揺れが収まっても油断せず、消防団員らの指示に従ってください。

Q. 消防団として、今後はどんな活動をしていきますか。

A. 避難生活中の隊員もいますし、以前訓練に使っていた校庭などには仮設住宅が建っているため、大がかりな放水訓練などはできないのが現状です。しかし、2013年の5月には訓練を開始する予定です。やはり日頃の訓練の積み重ねが自分を守ってくれるからです。

取材を終えて

課題克服への意識の強さを感じました

“日頃から消防訓練等を実施してきたが、今回発生した津波は「想定外」のものだったので、対応することができなかった”という、大変貴重なお話をうかがうことができました。また、今後は避難誘導をもっと強化しなければならないとの、団長の課題克服への意識の強さを感じました。

全労済
総務部
社会貢献推進課
主任
長倉博志

取材協力：南三陸町消防団 団長 菅原一朗さん　副団長 山内敏裕さん
南三陸町 危機管理課 危機管理係兼住民安全課 上席主幹兼係長 佐藤智さん

取材日：2012年10月26日

気仙沼市消防団
「津波てんでんこ」の真実を伝えていく

PROFILE

気仙沼は漁港の町だ。気仙沼漁港は、カツオやサンマ、カジキなど日本有数の水揚げを誇り、マグロ遠洋漁業の重要な基地のひとつにもなっている。その気仙沼一帯が漁船用燃料タンクの倒壊により激しく燃え上がっている映像は、震災当日のテレビで何度も放映され、「津波火災」という二次災害の恐ろしさを全国に知らしめた。震災当時、860人が在籍していた気仙沼市消防団。津波が来ることを想定し、定期的に訓練を重ねていたものの、こんな事態は誰も予想していなかったという。消防団団長の武山さんと、気仙沼市消防団係主査の菅原さんに、今回の震災から得た教訓についてうかがった。

自然災害の前で、人間はあまりに無力であることを知った

震度５以上の地震が起きたら、幹部は防災センターに集まり、沿岸部の団員は水門門扉を閉鎖するなど、事前指示は行き渡っていたので、震災当日はそれに従ってみんな動いていました。ただ、あまりの事態に何をしていいかわからなかったのが正直なところでもあります。「徒手空拳（としゅくうけん）」という言葉が頭に浮かびました。自然災害に対して、人間の力はあまりに無力です。電気が止まると、夜は目の前にあるものすら見えなくなる。マッチの炎の明るさが、身にしみてわかりました。私は、避難誘導をしてから防災センターに駆けつけたのですが、２～３日は家族と連絡が取れず、亡くなったかもしれないといわれていたことを後で知りました。

陸に打ち寄せたがれきの中、捜索活動をする消防団員

ツイッターの情報拡散で、東京消防庁が動いた

気仙沼では津波だけでなく、大規模な火災も発生しました。潮見町の中央公民館には450人ほどが避難していたのですが、周辺は押し寄せる津波で水浸しになり、海面のがれきに火がついて炎に取り囲まれてしまいました。そこに避難していた方が息子さんにメールを送り、その惨状を息子さんがツイッターで拡散。猪瀬直樹東京都副知事（当時）まで届き、震災翌日の朝に東京消防庁が一気に気仙沼に救助に来てくれました。これは本当にありがたかったですね。消防団長としては、「これで少し消防団員を休ませることができる」とほっとしました。

気仙沼、ロンドン、東京を結んだ救出劇だった

後で会えると信じて逃げる。それが、本当の信頼関係

この言葉の意味は、体験しないとわからなかった

三陸の先人の教えとして「津波てんでんこ」という言葉があります。「てんでん（こ）」の意味は「各自」「めいめい」。つまり、津波が来たら、各自ばらばらに自力で高台へ逃げろ、ということです。この言葉の意図することが、震災で本当によくわかりました。それが結局、一番多くの人の命を救うのです。家族を信じて、自分は逃げる。自力でどうにかするから安心して、という本物の信頼関係を日頃から築いておくことが大事です。家族を亡くした人にも「津波てんでんこだから」と言うと、少し納得できる。厳しいようで優しい言葉なのです。

Q&A

Q. 震災が起こったときに、気をつけるべきことはなんですか。

A. 災害が起こっても、自衛隊や消防署員はすぐには来られません。隣近所の協力が生き残るための切り札になります。まずは自力で避難する自助、そして周りと助け合う共助、最後にプロの公助が来る。それを意識して避難してください。

Q. 震災を経て、消防団として今後どうしていきたいですか。

A. 今後の一番の目標は、殉職者を出さないことです。もう消防団をやめてほしいという団員の家族の声も聞きました。でも、消防団をやっていてよかったと言ってくれる団員もいました。今後は、無理をせず、自分の命を最優先にするよう徹底していきたいです。

取材を終えて

「津波てんでんこ」の意味をあらためて実感しました

あらためて「津波てんでんこ」の伝えたいことを感じることができたという団長の話を聞き、震災を経験したからこそ、その言葉の一つひとつが重みを持つのだとわかりました。経験者から話を聞くこと、また後世へと伝えることの大切さを実感しました。今回聞いた話を私の周りの方へ伝えていきたいです。

全労済
総務部
部長
髙地正

取材協力：　気仙沼市消防団 団長 武山文英さん　　気仙沼市 総務部 危機管理課 消防団係 主査 菅原幸典さん

取材日：2012年10月26日

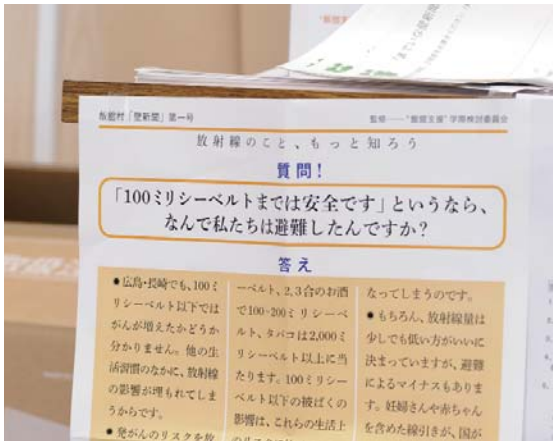
伊達東仮設住宅飯舘自治会
避難生活の先を照らす、あかりが欲しい

PROFILE

福島市から車で約１時間。阿武隈山地北部にある飯舘村は、なだらかな山々に囲まれている。「までいライフ」（までい：手間を惜しまず、丁寧に、心をこめての意）という暮らし方を提唱し、自給自足の村づくりを進めてきた。この美しい村が、東日本大震災で起こった福島第一原子力発電所の事故によって、放射能被害に遭った。地震自体や津波による被害はほとんどなかったにもかかわらず、避難生活を余儀なくされた村民たち。その複雑な心中を、伊達東仮設住宅飯舘自治会会長の佐藤さん、副会長の上田さん、管理人の長谷川さん、飯舘村生活支援対策課主任技師兼係長の高橋さんにうかがった。

畜産農家は、家族同様の動物を置いて逃げられなかった

震災当日は、津波の被害に遭った地域の方々を受け入れていました。そのうちに、どうやらここが放射線の高濃度区域に入ると言われ始めたんです。でも、どの程度危険なのか、今すぐ避難すべきなのか、私たちには何もわからなかった。多少知識のある人や、幼児のいる家庭では早めに避難していたようですが、本格的に村民の避難が始まったのは震災から２ヵ月近くたってからでした。体の不自由なお年寄りのいる家では、そんなにすぐには動けなかったこともあります。また、飯舘村は畜産農家が多かったので、家族同様の動物たちを置いては行けないという思いもありました。この仮設住宅は2011年８月１日と、だいぶ遅くから入居が始まったのです。



放射能についての壁新聞。自ら学び判断するしかない

避難しても地域の絆はそのまま残したい

なるべく地域のお年寄りがまとまって避難できるように対応したので、この仮設住宅にはかつて近所に住んでいた方々がたくさん集まっています。孤独になって、精神的にまいってしまうのが一番良くありません。自治会ではみんなで話したり、お茶を飲んだりできる場をつくろうと心がけています。また、班長は週に3回、一人暮らしの方や体の不自由な方に声かけをします。この仮設住宅は60歳以上の方が大半。若い世代はもう、別のところに移り住んでいます。私たちは、できれば故郷に帰りたいという願いを捨て切れず、ここにとどまっています。

無傷の家から避難しなければならなくなった

日々の幸せや未来への希望を取り戻したい

3世帯で暮らしていた家族も今はばらばらに

自然災害による被害だけだったなら、もう少し楽だったろうに。そう考える日々です。壊れたものは、努力して直していけばいい。でも放射能被害は、自分ではどうしようもないのです。家の周りの田畑の除染にも5～6年、山全体を除染するには100年かかるといわれています。いつ家に戻れるのかもわからず、先が見えません。これまで村では、春は山菜、秋はきのこと山の恵みとともに暮らしてきました。そういった暮らしの楽しみをすべて奪われました。でも現実を受け入れて、お互い助け合いながら前を向いていくしかないと思っています。

Q&A

Q. 仮設住宅での生活を始めて、必要だと感じたものはありますか。

A. 全国からボランティアでタレントや著名人の方々が来てくださるのですが、高齢で耳の遠い住民も多いため声がなかなか届かなかったのです。そこで、マイクとスピーカーを買うことにしました。緊急時に住民全員に呼びかけるためにも使えて便利です。

Q. 震災後、一番大変だったことはなんですか。

A. 正確な情報を得られないのが一番困りました。被曝量の数値も各報道によって違うし、何ミリシーベルト以下なら安全なのかという基準もばらばら。想定外の事態に、政府も対策を一から模索している状態なのでしょう。最後は自分で判断するしかありません。

取材を終えて

先の見えない原発被害の苦しみに、胸が痛みました

発災直後、国や県からの情報もなく各自の判断で避難した方もいましたが、畜産農家が多く牛を置いて避難できなかったという話を聞き、当時の不安な思いが伝わってきて心が痛みました。「避難するならまとまって同じ仮設住宅へ行こう」という判断で動かれたことに、皆さまの強い結束力を感じました。

全労済
総務部
副主幹
永吉裕子

取材協力：伊達東仮設住宅飯舘自治会 会長 佐藤忠義さん　副会長 上田哲夫さん　管理人 長谷川花子さん
飯舘村 生活支援対策課 生活支援係 主任技師兼係長 高橋祐一さん

取材日：2012年10月31日

南相馬緊急防犯パトロール隊（ボランティア）

この大切な町は、地域住民にしか守れない

PROFILE

南相馬市は、「相馬野馬追」などで知られる由緒ある町だ。震災時は、震度６弱の揺れに加え、巨大な津波により海岸線から約２km付近までの地域が壊滅。高さ数十mの防潮林も歯が立たなかった。さらに、福島第一原子力発電所の放射能漏れによって、屋内退避区域に指定される事態に。地震、津波、放射能と３つの被害を同時に被った。震災後、桜井勝延市長がYouTubeで世界に窮状を訴えるなど、ほかとは違う動きを展開してきた南相馬市。緊急防犯パトロール隊も「国や自治体にはできないことを」と、2011年３月末に独自に結成された、南相馬市最初の防犯組織だ。隊長の嵐さんに、市の現状とこれからについてうかがった。

避難後の家屋で盗難が。2011年3月末から自主的に見回りを始めた

震災後、ここは、原発の30km圏内なので、一時、自衛隊も警察も撤収してしまいました。電気も届かない真っ暗な町で、自分たちの身は自分たちで守るしかなかった。だから、防犯パトロール隊を結成したんです。住民が避難した家から不審火が出たり、盗難が起こったりしていました。ガラスが割られて、パソコンや薄型テレビが盗まれている現場にも遭遇しました。そういった犯罪を防ぐために、県外ナンバーやレンタカーなどの車を見つけたら声かけをします。県外の警察も応援に来ていますが、土地勘がないし、人脈もありません。不審者や不審車両を判断することができないのです。このパトロールは、地元のつながりがあるからこそできる防犯です。

倒壊した家屋がそのまま放置された町を見回って走る

市民は家族、生命は平等。市民の誇りを持って助け合おう

人命救助や遺体の捜索などもしました。津波に飲まれたご遺体は、洗濯機の中で振り回されたような状態の方もおられました。とても痛ましく、放っておけません。20km 圏内は傾いた家がそのままになっています。牧場には牛が放置されたまま。犬や猫も同様です。医療も介護も人材不足で、国の定める規制に従うと受け入れられず、特別に対応しました。この状態は、10年以上続くでしょう。東日本大震災と原発事故でわかったのは、国には頼れないということ。南相馬市民として自信と誇りを持ち、「本気・やる気・元気」を合言葉に皆で助け合っていきます。

不安を乗り越え、南相馬で暮らす決意を固めた

パトロール隊の存在を知って涙が出た。地域住民だからできること

当時のことは、今思い出しても涙が出るほど

（志賀公子さん談）私は震災直後、県外へ避難していました。テレビの報道で、パトロール隊のことを知ったのです。涙が止まりませんでした。食料も燃料も満足にない町に残り、頑張ってくれている人がいたなんて……。これは、帰って協力しないわけにいかないと思いました。今はパトロール隊を手伝いながら、飼い主が避難し、置いていかれたペットたちの餌やりなどのボランティアもしています。これは、どこに誰が住んでいたかわかるからできる活動です。地元の住民が、声をかけ合って地域を守る。それができるのが田舎の強みなんです。

Q&A

Q. 震災後、一番必要を感じたものはなんですか。

A. ガソリンです。徐行運転でパトロールをしていると、とにかくガソリンを消費するんです。震災直後は、備蓄していたドラム缶からポンプで汲み上げていました。ガソリン代は自己負担しているので大変です。でもやるしかないですからね。

Q. 東日本大震災と原発事故を経験した南相馬市には、これから何が必要なのでしょうか。

A. 南相馬で長く暮らし、働いている人には何かしらの「癒し」が欲しいですね。息抜きの場があるといい。将来的に、放射能や経済面でいつも不安を抱えているような状態が続くと思います。心がくつろげる場所があると、また頑張れると思うんです。

取材を終えて

復興が地域の助け合い精神で支えられていることが印象的でした

被災地では、国や市町村が主体となり、復興に向けた取り組みを進めていると思っていました。ところが、今回の取材で、復興の主体は地域の住民であることがわかりました。「家も家族もなくした被災者を本当の意味で救えるのは、毎日顔を合わせている地域住民同士」という嵐隊長の言葉が非常に印象に残りました。

全労済
福島県本部
事業推進部
事業推進課
主任
橋本敏満

取材協力：　南相馬緊急防犯パトロール隊 代表 嵐孝治さん　　隊員 志賀公子さん

取材日：2012年10月31日

東日本大震災・防災レポート No.13 浪江町仮設住宅自治会 Q&A

イベントで食事を提供するときも長机が活躍している

東日本大震災により、隣接する地域で福島第一原子力発電所の事故が発生。浪江町東部を含む区域に避難指示が出されたため、二本松市役所内に仮役場を設置した。

Q1. 自治会の防災・防犯の主な活動について教えてください。

A. 各仮設住宅に対して、自治会で見回りをしました。また、夜間の防火よびかけや警備活動なども行いました。

Q2. 防災・防犯について、重視したい活動や今後の課題は？

A. 仮設住宅ごとに、構造や入居者の年齢構成が異なるため、それぞれの住宅に合わせた防犯体制を組むことが必要だと思いました。また、借り上げ住宅に避難している方に対しては、避難先の防災・防犯体制に頼る部分が多く、浪江町独自の活動は難しいのが現状です。

Q3. 全労済の助成金は何に使いましたか。

A. 自治会の警備などの活動に必要な長机を35台購入しました。

Q4. 今後、全労済へ期待することがあれば、教えてください。

A. 身近なもので、しかもなかなか支援でいただくことのない備品を整備でき、大変助かりました。ありがとうございます。今後も被災地・避難者に寄り添った支援を続けていただければ幸いです。

東日本大震災・防災レポート No.14 楢葉町仮設住宅連絡員会 Q&A

住民に向けて総合安全教室を開催

福島県浜通りにある楢葉町には、福島第二原子力発電所の1・2号機がある。第一原子力発電所事故の影響で、今は町の仮役場をいわき市に設置している。

Q1. 自治会の防災・防犯の主な活動について教えてください。

A. 消防署と連携し、火災予防のための仮設住宅内巡回および防火訓練を行いました。また、交通安全教室や、防災・防犯に関する総合安全教室を、自治会や警察署などと一緒に開催しました。

Q2. 防災・防犯について、重視したい活動や今後の課題は？

A. 防災に関する安全教室などは、今後も定期的に開催する予定です。仮設住宅内の防犯については、自治会で組織化し、体制を整えていきたいと考えています。

Q3. 全労済の助成金は何に使いましたか。

A. 連絡員が戸別訪問するときのバッグと防寒着を購入しました。
また、防災・防犯を啓発するための看板も作成しました。

Q4. 今後、全労済へ期待することがあれば、教えてください。

A. 現在のところ特にありません。ご支援いただきましてありがとうございました。助成金については、有効に活用させていただきました。

千葉県旭市

被災者の方々に「勇気」と「元気」をお届けする

復興応援イベントの開催

千葉県旭市では、地震発生後２時間30分が経過してから、7mを超える津波が海岸沿いに押し寄せました。死者13人、行方不明者２人、住宅被害が4,000世帯あまりにも及んだなかで、奇跡的に各自主防災組織に壊滅的な被害はありませんでした。旭市において前述のような甚大な被害があったことはあまり知られておらず、支援も少ないなか苦労された被災者の方も多数いらっしゃいます。そこで、全労済千葉県本部では、被災者の方々に「勇気」と「元気」をお届けすることを最優先の課題として位置づけ、旭市と旭市社会福祉協議会の後援のもとに「旭市復興応援イベント」を開催しました。

防災への意識を新たにする1日に

旭市では、2012年８月19日(日)の13時00分から、千葉県東総文化会館にて「旭市復興応援イベント」を開催しました。参加対象者は東日本大震災で被害に遭った旭市民の方々です。1,200世帯へ招待状を送付し、旭市広報に一般応募要項を掲載しました。結果、応募総数301世帯888名、参加総数608名でした。

当日は、天候にも恵まれ、早朝８時30分から待っていてくださった方もいました。入場待ちの列ができたことから、12時30分開場を12時00分に変更し、入場を開始しました。イベントでは、地元の早期復興と各家庭での更なる防災強化を目的に、「千葉県産食材を使った非常食抽選配布(生活協同組合ちばコープからのご提供)」や「防災グッズが当たる抽選会」が行われました。また、被災者の方々に復興に向けて「勇気」と「元気」をお届けするため、俳優の風間杜夫さんによる落語会やお笑いライブを公演し、参加者のみなさまから高評を得ました。ホール前に設置したパネル展「東日本大震災の復興への取り組み」にもたくさんの方が、熱心に見入っている様子が見られ、震災をふまえて、防災への意識を新たにする1日となりました。

非常食や防災グッズが当たる抽選会を開催

ホール前のパネル展に熱心に見入る人たち

まとめ

「東日本大震災復興支援特別枠」報告書“記憶を明日に”の制作を終えて

この取材を通じて、あらためて「東日本大震災」の甚大な被害を痛感するとともに、自主防災組織の地域に対する責任感の強さと献身的な行動に感動いたしました。

暗闇の中、資機材もなく、二次災害の危険と隣り合わせの状態で必死に人命救助を行われていたこと。警戒区域にある自宅の大切な家財や思い出の品々が盗難に遭わないか、仮設住宅に避難しながら不安な日々を送られていること。地域に密着した消防団だからこそ、一人暮らしの高齢者を救助できたことなど、貴重な体験や実態を取材させていただきました。

ぜひ、一人でも多くの方々にこの報告書を読んでいただきたいと願いながら、制作をいたしました。

最後に、この報告書制作にあたりご協力をいただきました皆さまに、心より厚く御礼を申し上げます。あわせて、株式会社ディ・エフ・エフならびに関係スタッフの皆さまに感謝を申し上げます。

仮設住宅の住民の方々が、一つひとつ丁寧につくったフクロウ。販売することで小さな事業も生まれている

制作協力(敬称略)

ディレクション：(株) ディ・エフ・エフ 小林奈穂子
撮影：松本朋之
原稿：崎谷実穂、佐々木月子

ご協力いただきありがとうございました

保障のことなら

全労済

全国労働者共済生活協同組合連合会

全労済は、営利を目的としない保障の生協として共済事業を営み、組合員の皆さまの安心とゆとりある暮らしをめざしています。出資金をお支払いいただいて各都道府県生協の組合員になれば、各種共済をご利用いただけます。

〒151-8571 東京都渋谷区代々木 2-12-10
ホームページ：http://www.zenrosai.coop

ZEMS Zenrosai Environmental Management System

全労済は全国で環境保全活動に取り組んでいます。

VEGETABLE OIL INK

（2013.3.10000）デ